

悪魔の肖像—ヨーゼフ・ロートの物語作品に見るナチス批判

松 浦 一

小説家であると同時に優れたジャーナリストでもあったヨーゼフ・ロートは、第二次世界大戦下の1939年、パリに客死するまで、新聞・雑誌などのジャーナリズムを通して、ナチスを批判し続けた。とくにナチス政権が誕生した1933年、その翌年の1934年のロートのジャーナリズム活動の大半はナチス批判に割かれている。とくに1934年に出版された長編エッセイ『反キリスト』では、ナチス・ドイツを地獄の使者、反キリストになぞらえて、ユダヤ人排斥や政教条約などが辛辣に描かれている。

このようなロートのジャーナリズム活動に対して、同時期の彼の物語作品には一見して直接的に明示されたナチス批判は見られない。だが、『美の勝利』、『レヴィアータン』、『ある殺人者の告白』に登場するイエーネ・ラカトスは、各々の作品中で、常に主人公や主人公に近い人物を破滅に導いていく役割を果たしていることや、跛足などの外見的特徴から、悪魔、地獄の使者として描かれており、『反キリスト』の一種の文学的再現として描かれていると考えられる。また『ある殺人者の告白』でラカトスに与えられた、プロイセン国旗及びハーケンクロイツを連想させる「白、黒、赤」の色のモチーフなどからも、この登場人物がロートの物語作品におけるナチス批判の象徴になっていると考えてみた。

発表に際しての質疑応答では、上記のようなとらえ方は単純化、図式化しすぎであり、作品のある一面のみの理解にとどまっているという批判を中心に、『反キリスト』とヨハネの黙示録との関連の指摘や、ラカトスがなぜハンガリー人なのか、つまりハプスブルク主義者ロートとハンガリーの問題をどう盛り込んでいくかといった点が取り上げられた。

以上のような問題を踏まえた上でのこのテーマの今後の課題としては、なぜロートがジャーナリズム作品においても物語作品においても、ナチス批判に「反キリスト」という宗教的モチーフを用いることにこだわったかという問題や、ユダヤ人としてのロート、ハプスブルク主義者としてのロートがそこにどう関連しているかを考えてみる必要があるとされる。また、当然のことながら、ナチス批判をロートという作家のみを視点としてとらえるのではなく、当時の時代背景、文化的背景、及び他の作家たちの発言や作品などとの関連を通して、より総合的に考慮することが重要かつ必須であろう。